

【教育研究ノート】

台湾の高齢者デイケアセンターにおける「ケア」の意味
ことばを通じた人間性回復の場

佐藤 貴仁*

キーワード

傾聴, 日本統治における台湾, ケア, ことば, 人間性の回復

1. 本研究の目的

近年、対人援助やケアの実践の場において、傾聴の果たす役割に関心が持たれている（佐野, 2015；中西, 杉澤, 石川, 杉原, 2009；原, 2014；横山, 2006）。傾聴は、先入観や一般常識などの評価的枠組みを捨て、他者の言葉を共感的、受動的に受容し、その語りの奥行きを受け止めつつ、相手のいかなる心の動きにも聴き入る態度である。こうした行為が重視されるようになった背景として、「傾聴」そのものに、対人援助過程における一つの技法であることを超えた「援助的意味」が包含されていることが挙げられる。

特別養護老人ホームにおける実践から、傾聴の意味を考察した村田（1996）は、傾聴における「語り」が聴き手という存在を与え、同時に聴き手が「語り」を通して、その相手である語り手に存在を与えるという存在論的立場から、傾聴は援助者自らが「聴く」態度を取ることによって、「他者に『存在』を与えること」であるとしており、対人援助における傾聴の援助的意味を「他者の存在の回復と支持」にあると結論づけている。

では、傾聴における「他者の存在の回復と支持」とは何を指すのか。それは、これまで「聴かれた」経験がない相手（＝他者）を、人格を持った一人の人間として尊重しつつ、その語りを無条件に受け止めることで、人としての存在を与え認めること、すなわちその人自身を肯定する行為で

あると考える。実際に、継続的に傾聴を受けた者の多くは、その後の生活における態度や雰囲気に変化が見られるという。村田（1996）は、「それは多くの場合、その人の安定・成長・成熟を意味する内容である」と報告している。これは、傾聴により語り手自身の存在が与えられたことで、これまで否定的であった自己の回復がはかられ、結果的に心の安定に繋がったことを意味しているのではないだろうか。このように、傾聴という行為は「他者の存在の回復と支持」を実現し、語り手の心に直接働きかけることができるものであるが、「ケア」という側面から考えた場合、忘れてはならないのは、それが道具や目に見える身体的介助によらない言語を用いたケアだということである。言い換えれば、傾聴とは言語による心のケアであるといえる。

本稿は、台湾の高齢者デイケアセンター玉蘭荘¹の日本人スタッフ2名に対して行ったインタビューをもとに、施設会員に対する「ケア」の本質が、傾聴にあったことを明らかにする。特に、傾聴の持つ意味である「他者の存在の回復と支持」を鍵概念として、玉蘭荘という施設を介護支援が必要な高齢者のためのケアの場という側面から捉えるのではなく、そこで実際に行われていた「ケア」が、会員の存在の回復と支持にどう結びついていったのかという過程をスタッフの視点から詳述する。さらに、こうした心のケアとも呼ぶべき行為が「日本語」で行われた意味を考えた上

* 早稲田大学日本語教育研究センター（Eメール：satotakahit@gmail.com）

1 社団法人台北市松年福祉會玉蘭荘（URL：http://www.gyokulansou.org.tw）

で、玉蘭荘という施設が果たしている役割を考察し、その意味を捉えることを本研究の目的とする。

2. 玉蘭荘について

2. 1. 玉蘭荘概要

本研究を行うにあたり、全面的に依拠した玉蘭荘という施設の概要を説明する前に、本稿における「ケア」の捉え方を明確にしておきたい。一般的に、「高齢者デイケアセンターにおけるケア」から捉えるケアの意味は、福祉施設で行われる高齢者を対象とした介護支援だと考えられがちである。しかし、本研究における「ケア」とは、「高齢者介護」という文脈で語られるものではない。実際に玉蘭荘に集う人々は平均年齢が80歳以上の「高齢者」がほとんどであるが、そこで主に行われていることは、身体的援助等のケアワークではなく、「日本語によるケア」である。これは、玉蘭荘という施設の特徴を最もよく表しており、ホームページに記載されている以下の施設紹介文にも見て取ることができる。

玉蘭荘は、(中略)日本語を通して心身ともに支えていく高齢者のためのデイケアセンターを目指して誕生しました。戦前や戦後に台湾や中国の方と結婚した日本婦人や、かつて日本教育を受けた台湾の人々にとっても、日本語によるケアは大きな意味を持っています。(玉蘭荘ホームページ「玉蘭荘の紹介」より抜粋)

では、「日本語によるケア」が持つ意味ならびに、台湾にありながらも来所者の約9割である台湾人に対し、日本語で「ケア」を行う意味はどこにあるのだろうか。これらの疑問に答えるべく、施設の紹介、活動形態と内容および、会員が持つ背景について以下に述べる。

玉蘭荘は台湾の台北市に所在する、日本語で活動を行っている高齢者のためのデイケアセンターである。日本のキリスト教組織が母体となって1989年に誕生したこの施設では、通常1週間に2回、月曜日と金曜日に活動日を設けている。活動内容は、キリスト教団体によって設立された経緯から、外部より招聘した牧師による礼拝に始まり、歌唱や手工芸、習字や英語、医学講座など、

それぞれ専門家を招いて実施しているほか、遠足やバザーなどの行事に加え、日本の高校生や現地の日本人学校の児童生徒との交流会なども、不定期で実施されている。

このような活動を日本語で行うことが、先述した玉蘭荘における「日本語によるケア」に繋がっていると捉えられるが、その運営は日本人、台湾人双方による常勤スタッフとボランティアスタッフに支えられている。毎回の活動には常に40～50名の会員が集っているが、一体彼らはどのような背景を持っているのだろうか。玉蘭荘のパンフレットには、そのタイプを大まかに3つに分けて以下のように説明されている。

1. 過去50年に及ぶ日本統治時代(1895年～1945年)に当時強いられた日本教育により、文化や習慣までも影響を受けてきた台湾の人々(台湾生まれの日本人も含まれます)。既に日本教育により自己形成がなされてきたこの人々は、戦後再び台湾の教育を強いられるという境遇におかれました。
2. 日本統治時代に台湾の男性と結婚した日本婦人で、その後も家族と台湾に残り、子供を育て上げた人々。
3. 戦前日本より中国大陸に渡り、敗戦後現地で中国人と結婚し、夫と共に台湾に移り住んだ日本婦人。

(玉蘭荘パンフレットより抜粋)

現在、玉蘭荘に通っている9割弱の会員が1.に該当する。彼らは、日本統治時代に「日本人」として日本語で教育を受けた世代であり、期間の差こそあれ、そのほとんどが台湾教育令²施行後の公学校³(あるいは小学校)において教育を受けた経験を持つ、日本語を話す人々である。だが、戦

2 1919年施行。これを機に「台湾の教育制度は確立され、日本語教育の体制が整った」(蔡, 1989, p. 57)とされる。この教育令は、台湾人子弟を「日本人同様に化育する」方針をとり、より徹底した同化主義を標榜したとされている。よって、1919年以降に初等教育を受けた台湾人は、制度としては「日本人」同様の教育を受けることになったという歴史的経緯がある。

3 台湾人子弟が通う初等教育機関。原則的に日本人子弟(一部台湾人も含まれる)が通う「小学校」とは区別されていた。

後の社会において、そのほとんどが現在まで日常的に日本語を使用してきた訳ではなく、彼らの公的な日本語の使用は、戦後間もない時点で終わっている。なぜなら、1947年から日本語に関する様々な禁止令が段階的に施行されたのに続き、1949年に戒厳令⁴が発令されたことにより、公共の場における日本語使用は禁止され、日本出自のものは社会から排除されるに至ったからである。こうして、社会における彼らの日本語の人生は、そこで終焉を迎えることになったのである。

玉蘭荘には、上記の背景を持つ者が会員の多数を占めるが、戦後から70年経った現在においては彼らも高齢となったため、歩行に困難を抱えている者や、来所には付き添いが必要な者もいる。それでも週2回の活動日には、欠かさず出席する会員も多い。そんな彼らとの出会いは2008年に遡る。きっかけは、当時台湾で日本語専門家として勤務していた機関発行の機関誌の編集業務を担当した際、玉蘭荘を取材したことによる。記事の本来の目的は、台湾の様々な場所で学習され、使われている日本語を紹介することにあつた。よって、従来の日本語学習者には当てはまらない彼らの存在は、取材対象として単純に興味を惹かれるものがあり、取材を申し込んだという経緯がある一方、その歴史的背景にまでは、私自身の意識が深く及んでいたという訳ではなかった。また、台湾において日本語を話す彼らの存在ならびに、その世代の人々が、玉蘭荘という施設に集まっている意味を捉えていたとも言い難いだろう。

だが、実際に玉蘭荘を訪問し、活気に満ちた雰囲気の中、会員とスタッフが生き生きと話す姿に触れ、当初の「単純な興味」とはまた違った思いが湧き起こってくるのを感じたのも事実である。それは、まさに自分たちの言葉として、玉蘭荘に関わるすべての人々が日本語で繋がっているという強い印象と、会員へのインタビューから、玉蘭荘における「ケア」について考えた場合、日本語が大きな役割を果たしているのではないかと直感的に感じたことであつた。その際のインタビュー

の一部を以下に抜粋する。これは、ある会員が玉蘭荘の活動に対して語ったものである。

ここでは日本語で讃美歌を歌って、日本語で聖書を読み、日本語で礼拝する。それが好きなんです。どうして(『日本語』による活動にこだわるの)か、と言われても分からない。その辺の感覚は成人してから日本語を習い始めた人と全然違うでしょう。日本語は自分の一部。日本語での活動がなかったら、ここには来ないでしょうねえ。

上記からは、日本語に強いこだわりを持っていることが分かる。また、ほかの会員は、玉蘭荘に集う人々が創り出している場の雰囲気について、「この活動はボランティアの皆さんが支えてくれていると思います。その方々が架け橋となって、いい雰囲気や文化を作り出している。日本語を通じて繋がっている感じです。もし、そういう雰囲気がなければ、ここはただのケアセンター」だと述べていることから、施設にとって日本語が大きな意味を持っていることが窺える。すべての会員がこのような思いで来所している訳ではないと考えるが、やはり玉蘭荘を語る上で「日本語」が一つのキーワードとなっていることは明らかだろう。では、玉蘭荘において日本語はどのように位置付けられているのか。それを探るべく、言語という観点からこの施設を捉えてみようという考えに至った。

2. 2. 「日本語によるケア」を巡る玉蘭荘の捉えられ方とスタッフの意識

既述の通り、玉蘭荘での共通言語は日本語であり、活動はほぼすべて日本語により運営されている。台湾に所在しているにも関わらず、このような性質を持つ玉蘭荘の特殊性からか、この施設を扱った論考も発表されている。

田村(2002)は、デイケアセンターという施設そのものに焦点を当てることにより、玉蘭荘が「日本語を介して高齢者を支える福祉施設」と捉え、センターでの活動がどのように行われているのか詳細に記述している。会員の活動や背景に焦点を当てた張(2011)は、「日本語世代」の人々が来所する理由を「日本的雰囲気に親近感を覚えるため」だと述べている。しかし、その背景にあ

4 1949年に施行され、1987年に解除された。戒厳令下においては集会・結社・言論活動などの自由が制限され、一般民衆に対する厳しい監視と政治的な抑圧が常態化し、いわゆる「白色テロ」(国民党政権に敵対的である人物に対する勾留、粛清の実施など)の時代が続いた(五十嵐、三尾：2006, p. 325)。

る「日本語世代の台湾人たちはなぜ玉蘭荘のような場所を必要とするのか」という、自らが呈した疑問に対する回答は、今後の課題として残している。大月（2011）は、台湾の日本統治という歴史的な経緯から同センターの必要性を捉え、その在り方として、「言語という問題を考えたときに、一般の施設とは違う視点でケアを行わなければならない」とするスタッフの証言を引用しているものの、言及の裏側にある言語とケアの関係にまでは、踏み込んで記述されていない。

このように、上記論考はそれぞれの視点を持ちながらも、「日本語によるケア」を行っているという玉蘭荘の固有性に目を向けている点では一致している。しかし、固有性を取り上げている一方、内実には触れていないため、その意味を考えるまでには至っていない。しかし、大月（2011）に見られた「言語という問題を考えたときに、一般の施設とは違う視点でケアを行わなければならない」という日本人スタッフの証言からは、スタッフ自身が言語に視点を置いた「ケア」を意識していることが分かる。このスタッフは、徳田（2012）においても、玉蘭荘では「何をケアするか」というと、『言語のケア』と答えていることから、それは明白であろう。また、別の日本人スタッフは、玉蘭荘に集う人々は皆「日本語が大きな結び目となって繋がっている」と述べ、台湾在住の日本人高齢者のみならず「台湾の日本語世代の方にとっても、日本語でケアすることが必要なのではないかと気づいた」（佐藤、2008）と証言している。

上述の日本人スタッフ2名は、会員に対する「日本語によるケア」の重要性について幾度となく言及している。しかし、本研究を始めた当初、私はそうした言動には留意していなかった。玉蘭荘のケアの内実を描くには、スタッフではなく、むしろ当事者である会員の語りを聴くべきだと考えていたからである。実際、スタッフよりも以前に玉蘭荘の台湾人会員15名に対しインタビューを試みており、初回のインタビューでは会員それぞれから、大いに意味のある語りを聴くことができた。だが、「玉蘭荘における『日本語』が持つ意味とは何か」という当初の問題意識に対する答えを、語りから導き出すことはできなかった。なぜなら、ケアを受ける側である当事者ゆえのことかもしれないが、彼らは玉蘭荘やそこでの活動に

ついて、「日本語で活動することが楽しい」「雰囲気がいい」「自分の家のように温かい」というような感想しか語らなかったからである。

一方、フィールドワークとして玉蘭荘に身を置き、活動日には常時10名前後いるスタッフの会員への対応を観察しているうちに、「日本語によるケア」の重要性を指摘したスタッフ2名とその他のスタッフには、明らかな違いがあることに気づいた。非常に感覚的であるが、先述のスタッフ2名には、他のスタッフにはない会員からの「信頼感」や、会員との「親密さ」が透けて見えていた。それ以外のスタッフは、ほとんどが夫の赴任に伴い台湾に滞在している駐在員夫人という立場のボランティアであった。駐在員は通常3年前後の赴任期間を過ごし、帰国の途につく。したがって、大多数のボランティアスタッフは、玉蘭荘での活動が滞在期間よりも短いことになり、週2回の活動だけでは、会員と深い関係性を築くことがないまま、日本へ帰国することが想定できる。だが、当該のスタッフ2名は、ともに約20年間という長きに渡る歳月の中で、彼らと深く関わり交わってきた経緯があり、客観的にも双方の結びつきが強いことが感じられた。それは、長く関わったからこそ構築された関係であり、そうした関係性の中で、スタッフ2名は「日本語によるケア」の重要性を体得したのかもしれないと考えた。

以上から、玉蘭荘における日本語の意味を探るのであれば、会員のみならず、彼らに長く関わっているスタッフに対してもインタビューをすべきではないか、という思いに繋がった。そこで、当初抱いていた問題意識である「玉蘭荘における『日本語によるケア』の意味とは何か」という疑問を明らかにすべく、上記スタッフ2名にインタビューを試みることにした。

3. スタッフへのインタビュー

3.1. インタビュー調査概要と分析方法

インタビュー当時、玉蘭荘の常勤スタッフであった真理子さん（仮名）と元ボランティアスタッフの陽子さん（仮名）に、「玉蘭荘においてどのような活動を行ってきたのか」というナラティブ生成質問を設定し、インタビューを行った。これは、これまでの活動に関連する自身の主観的

表1. インタビューデータ

対象	性別	活動歴（当時）	場所	日時	時間
真理子さん	女性	18年	玉蘭荘	2012年9月18日	1°58'12"
陽子さん	女性	21年	陽子さん宅	2012年12月25日	1°50'25"

な記憶を、現在の視点から自由に語ってもらうためである。なお、2人の基本的情報は表1のとおりである。

分析の観点として、2. 2. で概観した過去の論考や記事における2人の発言を手がかりに、初めて玉蘭荘を訪れた際に感じた私自身の問題意識にも通じる、「玉蘭荘における『日本語によるケア』の意味とは何か」という問題を設定した。分析に際しては「シークエンス性の形式を前提としている」（フリック、1995/2002, p. 420）ナラティブ分析を用いた。この「シークエンス性」とは、「インタビューで語られた流れではなく、出来事が起こった時間的な経過」を指す。ナラティブ・インタビューにおける語りは、その出来事と経験が時間的順序に沿って述べられる訳ではないため、シークエンス性を重視した分析においては、「語られた出来事を、その出来事の時間的な前後関係に従って並べ直す」（フリック、1995/2002, p. 430）ことが必要となる。

なぜ、この方法を採用したかという点、インタビューにおいて、会員と関わってきた時間の経過とともに、施設やケアに対する認識が変容していったことが、スタッフ両者から認められたためである。つまり、玉蘭荘に関わった当初から「日本語によるケア」に重要性を見出していた訳ではなく、活動を通じ、会員に接する中で気づき生まれ、そこから彼らに対する「日本語によるケア」の意味を捉えるに至ったことが分かった。よって、時間性に着目し、語りから時間軸に沿ったその変容プロセスを描き出すことで、「日本語によるケア」の本質的な意味の一端が明らかになると考えた。以下にその変容の過程を述べていくことにする。

3. 2. スタッフ両者の意識の変容

インタビューを分析した結果、真理子さん、陽子さんともに、時間の経過に伴う同様の意識の変容が見られた。それは、両者が玉蘭荘に関わり始めた当初の「高齢者福祉施設」という施設に対す

る認識から、その在り方に違和感を持ち始め、会員に接するうちに別の気づき生まれ、最後には自分たちなりの玉蘭荘および会員に対する捉え方の変化であった。両者の語りを元に、2人の意識の変容を時間の進行に従って捉えたところ、そのプロセスを以下の4段階に分けることができた。

- ① 玉蘭荘に関わり始めた当初の「高齢者福祉施設」における活動という認識
- ② 会員に接するうちに感じた「高齢者福祉施設」とは捉え切れない違和感
- ③ 会員のたわいもないことを聴くことによる彼らの喜びへの気づき
- ④ 日本人である自分が日本語に関わることの重要性に対する認識

3. 2. 1. 玉蘭荘に関わり始めた当初の「高齢者福祉施設」における活動という認識

2人の語りから、真理子さん、陽子さんとも最初は玉蘭荘を「高齢者福祉施設」と認識していたということが分かった。玉蘭荘に関わり始めた当初の印象を、真理子さんは以下に述べている。

（当時の玉蘭荘総幹事は）ここを老人福祉と思われて、結局、早く台湾の方に、ここをね、譲るんじゃないけど、担ってもらうということで。本土化ですよ。まあ、頭で考えればそうなんです。本土化というのは、自分たち、自国の人が自分たちでやっていくのが一番望ましいと。そういうふう考えられて、老人福祉という立場で考えられた。だから「真理子さんも一年くらいでね、あとは黒子のように後ろからサポートしてください」と言われたんですよ。はじめに入った時は「ああ、そうなんですか」と。老人福祉の頭で入ったんですよ。

また、陽子さんも「やっぱり最初は分からなかったんですよ。どういう風にすることがいいのか。どんなにすることが彼らの要求に合うのか、日本の老人と同じなのか、さっぱり分からなかつ

たですよ」と語り、自分に与えられた役割が見えなかったことを挙げています。そして、当時の会員に対するスタンスを「来る皆さんが何を望んでいるかっていうことですよ。私は、最初の頃は何か一生懸命してあげなきゃいけないと思ったんですよ。ボランティアだから」と、その立場を自分なりに考えて、活動していた様子を懐述している。しかし、陽子さんがそう考えていたのも無理はない。活動に関わることになった開設当初、玉蘭荘は高齢者を対象とした福祉施設という側面が大きく、施設の方針としても、日本から専門家を呼び、日本式高齢者ケアの方法を導入しようとするなど、技術的な部分を主眼に置いたケアセンターを創成するという目的があったからである。それは、真理子さんの発言にある「老人福祉」という表現にも表れているといえるだろう。よって、そうした施設の方針に従い、高齢者に対するケアのサポートをする場所であるという意識から、「何かしてあげなきゃいけない」と思っていたと捉えることができる。だが、真理子さん、陽子さんともに、会員に直に接するうちに、そうした施設の方針に次第に違和感を持つようになっていったのである。

3. 2. 2. 会員に接するうちに感じた「高齢者福祉施設」とは捉え切れない違和感

両者が感じた違和感とは、一体何だったのだろうか。真理子さんはスタッフとして活動し始めて「半年ぐらいしてから、私、違うなあというのに気がついたんですね。そうじゃないと。これは普通の老人福祉とは全然違う役割を担っている」と思ったと発言している。そして、会員一人ひとりに接するうちに、次第に彼らの背負う歴史的背景に意識が向くようになったという。

私も大分、初めは分からなかったですよ。何やったらいいか、何するところか。普通の老人の福祉…日本とはちょっと違うし、何なのかしらっていう感じで。頭では捉えられているんですよ。ああ、日本の教育受けて、日本時代ね、植民地教育を植民地の時代に強いられちゃって、頭では理解しているんですよ。でも、それはどういうことなのかってことはね、一人ひとりに会ってみたいとね、やっぱり分からないんですよ。

また、陽子さんも開設当初の方針に、どこか違和感を持っていたと述べている。医療的なケアの方法や高齢者のための福祉の在り方など、知識として必要な部分も当然あると理解した上で、それでも会員が欲していることは、そのようなものではないのではないか、という気持ちを持ちながら、活動を続けていた時期があったのだという。

(ボランティアとして) お茶を沸かししたり、スープを作ったりすることも大事なことで、私もそんなに負担に感じないでやったんですけども、何かねえ、それだけじゃないものを感じるようになったっていうか。(中略) やっぱり徐々に徐々にですけども、やはり3年、3年位ですかね、経ってから。

と語っている。また、真理子さん同様、違和感を持ちつつも活動を続ける中で、かつては「日本人」であり、日本語で日常生活を送っていた彼らの歴史的な背景を意識しつつ、会員を捉え始めるようになったという語りも見られた。

ただ単なる高齢者っていうだけではなくて、台湾のこの世代の方たちっていうのは、この世代の特殊な時代っていうか、今ではちょっと考えられないような、まあ、何ていうか、時代でしたでしょ、彼らの歩んだ道は。第三者から見ても、聞いてるだけでも、すごいなって思うんですよ。自分は一体、何人なんだろうかって疑問に思うくらい、あの人たちは苦しんできているんですよ。

それは、知識ではなく、彼らに直に接する中で得た視点であるという。なぜなら、90年代初頭であった当時は戒厳令が解かれて間もない時期であり、それまで話題にすることは公のタブーとなっていた日本統治時代の話などは、事前の情報として聞いたことがなく、かといって現在ほど情報化された社会ではなく、自ら何かを簡単に調べたりできる状況ではなかったからである。また、赴任する配偶者に付き添って来た陽子さんにとっては、台湾は予備知識もない未知の土地であり、日本との歴史的関係についても、ほとんど知らな

かったと証言している。

だが、互いに徐々に打ち解け、親しくなるにつれ、個人的な話をするようになったあたりから、ボランティアスタッフとして自分が求められているもの、彼らが求めているものが何かということをも具体的に考え始めるようになっていったという。それは福祉的観点から、技術的なケアの導入を目指す施設のポリシーに対し、「日本人である私がそれ（技術的なケア）をするより、もっと違うやり方でね、もっと私たちが求められているのは、違うんじゃないかなってという思いがあったんですよ」と語っていることから窺えるだろう。

3. 2. 3. 会員とたわいもないことを話すことによる彼らの喜びへの気づき

真理子さんは訪問スタッフとして職務に従事していた頃、その後の会員との関わり方を決定づけたある人との出会いを経験している。その語り口から、玉蘭荘に関わる者として、会員から何が求められているのかを考える上で、大きな気づきを得た出来事であったことが窺えた。その出来事は、部屋に閉じこもってしまって、家族もどう接していか分からなかったある会員の「お友達」が、日本語で日本時代のことを話せる真理子さんの訪問を喜び、「自分のアルバム開いたり、色んなことで少しずつ人生をね、語ってくれた」ことだったという。その際に見せた会員の「お友達」の様子から、「その時に私、ああ、この方は日本教育受けてるから、女学校時代のそういう思い出や色んなことは、私に話したかったんだなと。私に伝えたかったんだと思います、日本人の代表として。日本人に伝えたかった」ということが分かったと述べている。その相手の反応を通して、自分に求められているものがどのようなことであるか、腑に落ちた瞬間があったそうだ。それは、話を聴く相手が日本人であれば、「共感ができるんですね。共感があるんですよ」と言い、「自分は日本教育受けて、女学校で何々先生が、ってそういう部分。そういうのを話すのは、日本人がいいんですよ。日本人に伝えたかった。それでももう、すごい喜ばれて。穏やかになったからということ、ご家族もえらい喜ばれたんですよ。で、定期的に伺うようになっ」と、話したのである。このような出来事を通し、真理子さんは日本語で話す相手を受け止めることが「共感」を生むことに気づいたと共に、そこにいかに言語が関わって

るかという、ケアにおける「ことば」の重要性を感じ始めたのかもしれない。

一方、陽子さんも彼らとの信頼関係が構築されてきた中で個人的な話をするようになったというが、実際どのようなことをしていたのだろうか。

いや、何も出来ないですよ、それは。ただ、日常の活動の中でね、些細な会話の中で、彼女たちが、「ちょっとちょっと、陽子さん」って、すぐ呼ぶんですよ。呼ばれて行った時にね、丁寧に話を聞こうって、それぐらいです、私は。話を聞かせてもらう、それだけでした。

「些細な会話」の中で、たわいもない話をするのが、実は彼らが望んでいることではないかと思うに至ったというが、その気づきはどこにあったのだろうか。

話を聞かせてもらうことで、彼らが非常にいい表情で話されるんですよ。それでそれを「そうだったんですか。私、知らなかった」って。本当に知らないんですから、私たちの時代は。それで、「戦争の頃はこんなだったんだよ」とか、「こんなえらい目にあった」とか、「上官からすごいことやられた」とか、そういうことも最初は話してくれないんですよ、要は。でも段々親しくなるにしたがって「こうだったんだよ」ってね、話されるようになって。「ひどいねえ」とか、私たちも日本人、台湾人っていうこと忘れて「そんなひどいことやられたの?」とかね、「いや、それはもうあまりにもひどすぎる。でも、こういうこともいえるんじゃないかな」っていうようなことも私の中で感想があれば話したりとか。

というように、聴き手となった陽子さんは彼らの語りを親身になって受け止めてきた語りをする一方、

まあ、私たちに出来ることってというのは、何も技術も要らないし、何も、ある意味では必要ない。いっぱいものをあげたり、色

んなテクニク的なことをやるそれ以前にね、相手の話を聞いて、寄り添うことは大事ですよ。寄り添うってことは簡単なようで難しいんですけどね。

と、自身の行為を客観的にも捉えていることが窺える。また、言語に関しては以下のように語り、子・孫世代との文化的・言語的断絶があることを示唆した上で、それを受け止める重要性を以下に触れている。

やはり、自分の人生を聞いてもらいたいという欲求、特にあの方たちは日本語で色々なこと学んできたしね。(中略) その頃、何とはなく吸収してきていると思うんですよ。その辺はね、私たち日本人だと「あ、そうね」って相づちを打てるようなことも台湾の若い人には分かってもらえないとか、いっぱいあるんですよ、そういうことは。(中略) それで、「お父さんお母さん、また日本のこと言って。何が日本がそんなにいいのかわかるか」って、逆に子ども達に反発されたりとか、そういう方は多いです。

3. 2. 4. 日本人である自分が日本語に関わることの重要性に対する認識

真理子さんは、会員に直に接することを通して、日本人として日本語に関わることの重要性を認識するようになった。それは、日本人である自分が会員の話に丁寧に耳を傾けることが、彼らにとって特別な意味を持つことに繋がっているという、体得的な実感があったからであろう。

役割としてね。共感を持って、一緒にその人の辿ってきた人生、しかも日本教育を受けた人生をね、傾聴し、それから気持ちを共にシェアしていく。それは大切ですね。彼らが、そういうことをやりたいのは日本人なんですから。台湾の方とやっても、そこら辺のことは、あまり意味がない。

上記のように語るのは、「日本人」であった彼らが、戦後、そうした過去がなかったようにされてしまった世界を生きていた中で、日本人が日本語で受け止めることの意味をどこかで感じていた

からではないだろうか。だからこそ、これまで彼らに接してきた自分が、その役割を担っていると考えることができたのだろう。

(彼らは) 日本人に伝えたいし。こういう教育、自分たちは受けたんですよってお話しすること、伝えてくださることによって、その方もすごく平安になられたり、自分の人生の、こう何て言うのかな、ヒストリーを辿っていく一つの大きなステップになっているとは思いますがね。そういうことされることで。日本だったら、日本人同士で構わないけど。ここだったら、そうじゃない訳ですよ。台湾の方に語っても、あんまり理解されないし、共感がないと思います。日本の方だからこそ、日本の教育を受けた時のことを話したいし、聴いてもらいたい。そういう部分でしょうね。それは大きい役割だなと感じましたね。

そして、戦前、「日本人」として生きていた彼らが自分の歴史を日本人に語る意味を、真理子さんは実際の体験から以下のように捉えている。

これは日本の人がもっとしっかり関わって、戦争で傷ついたり色々ね、そのような歴史に翻弄された方々が、日本の人にもしっかり関わってもらって、私たちの人生の最後をきちんと見送ってほしいという非常に強い要望が感じられたんですね、私自身、一人一人を見る中で。あ、これこそね、歴史に翻弄された方々が日本教育を受けたけれども、(それが戦後否定されたが) 最後に、日本語が許されんだと。非常にあの、人生においてそこら辺が全然、空白としてね、もうずーっと押し潰されてこられた訳ですよ。

と語るこうした思いがあったからこそ、彼らの失われた言語である日本語を話す日本人が、日本語で受け止める必要性を感じていたのではないだろうか。また陽子さんも学生時代を東京で過ごしたという以下の会員の話から、日本人であるという自分の立場で語りを受け止めてきたその事実を捉えていることが分かる。それは、しっかりと彼ら

の話に耳を傾けてきたからこそ、掴み取ることができたのではないだろうか。

その日本の風景とか、車窓から見える日本の特徴的な建物とか、そういう話をすごくなさるの。「僕は、もうあの風景を思い出すと懐かしいなあ」って。「そうですね、小さな家がいっぱいあるんですよね、台湾と違ってね」って話をしたら「そうそうそう」って。私はクリスチャンじゃないですけど、その方はクリスチャンで。男性ですけどね。向こうで、通えなくなってからはね、電話でね、一緒に讃美歌歌いました。「一緒に歌って」って言われるの。「何番」って「聖書の、讃美歌の何番」って言われて、一緒に歌うんですよ。で、彼はやっぱり、日本人である私とこうしたかったんだなって思います。

そして、どのようにして彼らと関わるのがよかったのか、ということについての解釈として、受け止めることが必要であると、以下に述べている。

(高齢者福祉に立脚した)テクニク的なケアっていうか、台湾の高齢者の人たちに対して日本人の立場からすると、そういうことではないんじゃないかと思ったんです。相手の心の訴え、非常にあの、恋い焦がれるっていうか、そういう日本に対する思いを持っている人たちに、あちらも喜んで(語って)、私たちが聞かせてもらう、そのキャッチボールをしながらやることの方が、あの時の私の立場では、そっちの方が重要だと思ったんですよね。

以上から、両者が手探りで活動に関わり始め、玉蘭荘の会員と接するうちに気づきを得ていったことは、日本教育を受けた彼らに必要なこととして、日本人である自分たちが日本語を話す彼らをしかりと日本語で受け止めるということが重要だという認識であることが分かった。これは、決して「大掛かりなこと」ではないが、しかし、非常に大切なことだともいえるのではないだろうか。

4. 考察

真理子さんと陽子さんのインタビューの語りから、関わり始めた当初は両者とも、玉蘭荘を「高齢者福祉施設」という認識で捉えていたことが分かった。そして、その中で会員から何が望まれているかが見えない中で、どう対応すべきか戸惑いながらも活動を進めるうちに、それぞれが同様のプロセスを辿ったように、「日本語によるケア」の重要性に気づいていったことが窺えた。この「日本語によるケア」の意味として、スタッフ両者が語ったことは、日本語を用いて何か特別なことをする訳ではなく、むしろ会員の思い出話や、たわいもないことをただ聴くことにあると述べている。真理子さんは、玉蘭荘スタッフの役割の一つとして、日本語で「共感を持って日本教育を受けた人生を傾聴すること」が、会員に対してすべきことであると語り、陽子さんも同様に、聴き手となり「相手の話を聞いて、寄り添うことは大事」だと語っている。また、スタッフとしてどんなことをすべきか暗中模索をしていた時期に、話を聴く「聴き役」に徹し、彼らの話を受け止めたことにより、彼らが「穏やかになった」ことや「彼らが非常にいい表情で話される」ようになったという気づきが生まれていることが分かる。こうして、スタッフとしての役割を考えた場合、日本語で「傾聴」することが、大きな意味を持つと捉えるようになったのである。

「傾聴」の持つ意味を探究した村田(1996)は、援助者が「聴く」態度を取ることによって、「傾聴」が他者に存在を与えること主張し、対人援助における「傾聴」の意味を「他者の存在の回復と支持」にあると結論づけた。これに鑑みると、スタッフ両者も彼らに接する中で、戦後社会における日本語の排除によって、自分自身の「ことば」を否定され、それまでの「日本人」としての人生をいわば、なかったことにされた境遇を日本語で受け止めることが、彼らの存在を認めることやその回復に繋がると、体得的に理解したのではないか。では、なぜ彼らに日本語で関わり、彼らを日本語で受け止めることが重要だと思うに至ったのだろうか。

言語は人間同士のコミュニケーションに不可欠であり、また自己表現の手段として、人間の社会生活においてなくてはならないもの、つまり意思

疎通のための道具や手段であるとする考え方があ
る。一方、言語は他者との意思伝達を行うためだ
けではなく、自身の内的思考を深めたり、外言化
するための思考を練ったりするために必要なもの
でもあるといえる。前者は言語道具主義であり、
後者は言語本質主義と呼ばれるものであるが、後
者に立脚して考えた場合、言語を習得するという
ことは、単なる言語知識の獲得ではなく、人間の
思考や人格形成に関わる営みであると捉えること
ができる。よって、出生時から「日本人」として
育ち、徹底した同化主義のもとで教育を受け育っ
た彼らは、「日本語」によって他者との相互行為
を行うことでその人格を形成し、自身の心理を
発達させてきたといえるだろう。つまり、彼らの
「日本語」は、「中国語」や「台湾語」などと並列
的に存在する、単なる一言語としての「日本語」
ではなく、分ち難く人格が織り込まれ身体化さ
れた自身の「ことば」とも呼べるものだったので
はないだろうか。だが、その「ことば」により自
己を培っていた過程で、彼らの「ことば」は社会
から排除されるに至ってしまったのである。

中学1年まで日本語で教育を受けた玉蘭荘の
会員に、ライフストーリーインタビューを試みた
佐藤（2014）が、「日本語は自分の母語である」
とする彼の証言から、戦後の社会において、それ
が使用できなくなった苦悩を浮き彫りにしている
ように、それは単に社会の主流言語が入れ替わっ
たことを意味してはいないことが分かる。田中克
彦が「母語は運命であるから、皮膚の色同様に、
一たん身についてからは、その個人から引き離
して、別の言語で置き換えるわけには行かない」
（田中、1975、p. 55）と述べているように、中国
語への変更を迫られた彼らにとっての日本語とは、
「皮膚の色」に例えられるがごとく、身体化され
た自身の一部だったといえるだろう。

身体化された自身の一部を否定されること。そ
うした行為は人権を否定されることにも繋がり、
それは単に社会における「日本語」の使用を制限
されたという問題ではないことに繋がる。つまり、
「ことば」を使用する権利を他者の要請によって
変更を迫られたり、奪われたりするということは、
社会生活を営む人間としての権利が保障されな
くすることにも通じることだといえるだろう。この
言語に関する権利について、人種を根拠にした人
種差別（racism）や、性に基づく性差別（sexism）

に対応する「言語差別」（linguicism）という概
念を提唱したスクトナブ＝カンガスは、言語に関
する権利、すなわち言語権を以下のように定義
している（フィリップソン、スクトナブ＝カンガス、
1999）。

- ① すべての社会集団は、一つまた複数の言語
に肯定的帰属意識を持つ権利、およびその帰
属意識を他者から認められ尊重される権利を
有する。
- ② すべての児童は自集団の言語を十分に習得
する権利を有する。
- ③ すべての人は、あらゆる公式の場で自集団
の言語を使用する権利を有する。
- ④ すべての人は、自身の選択にしたがって、
居住国の公用語のうち少なくとも一言語を十
分に習得する権利を有する。

上記「自集団の言語」は、発表された当時は
「母語」と記載されていたことから、「自集団の言
語」はそれと同等の意味を包含していると解釈す
ることができるだろう。前出の田中（1975）は、
母語が個人から引き離すことができない「このよ
うな性質のものであるとすれば、ある個人が他の
言語のいずれでもない、固有の母語を用いること、
人間生まれながらの権利であって、何人もこの権
利を侵すことはできないはずである」と続けている。

そう考えると、戦後日本語から中国語へと、社
会の言語が切り替わったという事実は、単に言語
が入れ替わったということではなく、人としてあ
る「ことば」を使う権利、すなわち言語権を剥奪
されたことになるのではないだろうか。なぜなら、
この言語権に関し、フィリップソン、スクトナブ
＝カンガスは、はっきりと「言語権は人権の一種
である」（フィリップソン、R., スクトナブ＝カン
ガス、1999、p. 95）と謳っていることから、彼
らを例に取った場合、社会的な日本語使用の禁止
は、人として生きることを否定されたことになる
からである。

5. 玉蘭荘における「ケア」の意味

フィリップソン、スクトナブ＝カンガス（1999）
は、言語権の保証として、未来に向けた規約にな

るべき宣言を提唱しているがその中の項目として以下の文言がある。

「母語の変更は全て自発的であって強制されてはならない」(p. 123)

玉蘭荘に集う日本教育を受けた経験のある彼らにとって、この上記の文が守られなかったことから、日本語が禁止されたことは「言語」の問題のみならず、アイデンティティの喪失や、社会、次世代の家族との断絶感、人格形成などにも多大な影響を及ぼすことになった。だからこそ、戦後から70年が過ぎた現在においても、彼らにとっては玉蘭荘のような場が必要であり、そこで行われている「日本語によるケア」というのは、単に日本語を懐かしむといった情緒的なものではなく、むしろ「人権」という観点から捉えた、人間性の回復の場として機能しているコミュニティといえるのではないか。失われた彼らの「ことば」を傾聴によって受け止めるということは、実は「彼ら自身そのもの」を受け止める行為でもあったに違いない。なぜなら、彼ら自身が深く織り込まれた言語である日本語は、彼らと分かち難く結びついたものであり、不可分の関係にあるからである。すなわち、「ことば」とは人格と言語が織りなすものであり、それは彼ら自身の一部であると捉えることができるだろう。そうしたことを真理子さんと陽子さんは知識ではなく、直接彼らと触れ合うことで体得し、その経験から「日本語によるケア」の重要性を訴えたのではないだろうか。つまり、玉蘭荘における「日本語によるケア」とは、「ことば」のケアであり、傾聴による彼ら自身の「ケア」でもあり、それは人間性の回復を意味するものでもある。よって、玉蘭荘という施設は単なる高齢者デイケアセンターではなく、人間性の回復の場であると考えられる。

文献

- 五十嵐真子、三尾裕子(編)(2006).『戦後台湾における〈日本〉植民地経験の連続・変貌・利用』風響社。
- 大月克巳(2011).台湾「玉蘭荘」が創立22周年——日本語で高齢者デイケア：今も残る統治時代の影響。『厚生福祉』5841, 2-4.
- 蔡茂豊(1989).『台湾における日本語教育の史的
研究——一八九五年～一九四五年』東呉大学
日本文化研究所。
- 佐藤貴仁(2008).日本語で活動を行うデイケア
センター「玉蘭荘」『いろは』27, 1-2.
- 佐藤貴仁(2014).現在を生きるかつての『日本
人』(2)——母語を奪われた人(その2)『交
流』874, 7-12.
- 佐野真紀(2015).傾聴するボランティアが持つ
課題についての一考察——「聴くこと」の意
味をめぐって『障害者教育・福祉学研究』11,
39-44.
- 田中克彦(1975).『言語の思想』NHK ブックス.
- 田村智恵子(2002).台北市のデイケアセンター
“玉蘭荘”を訪問して。『華頂社会福祉学』1,
65-72.
- 張紋絹(2011).台湾台北市における日本語によ
る高齢者デイケアセンター「玉蘭荘」に関す
る基礎的研究『東アジア研究』55, 65-88.
- 徳田達郎(2012).台北に派遣されたもうひとつの
使命『在外教育施設 指導実践記録』35, 208-
209.
- 中西泰子, 杉澤秀博, 石川久展, 杉原洋子(2009).
閉じこもり高齢者への傾聴ボランティア活動
に対する利用者評価——聞き取り調査に基づ
いた検討『研究所年報(明治学院大学社会学
部附属研究所)』39, 85-96.
- 原千恵子(2014)『高齢者カウンセリング——傾聴
からはじまる出会い』学苑社。
- フィリップソン, R., スクトナブ=カンガス, T.
(1999). 木村護郎(訳)言語的不正と言語権.
言語権研究会(編)『ことばへの権利——言語
権とは何か』(pp. 95-128) 三元社.
- フリック, U. (2002), 小田博志, 山本則子, 春
日常, 宮地尚子(訳)『質的研究入門——〈人
間の科学〉のための方法論』青土社. (Flick,
U. (1995). Qualitative forschung. Reinbekbei,
Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag.)
- 村田久行(1996).傾聴の援助的意味——存在論的
基礎分析『東海大学健康科学部紀要』2, 29-
38.
- 横山貴美子(2006).話し相手ボランティアの活
動支援としての『養成講座』に関する一考察
——ハンナ・アレントの「活動」理論を視座と
して『山梨県立大学人間福祉部紀要』1, 11-
20.

Note

The meaning of the word “caring”
in a Taiwanese adult day care center

The community of reviving humanity through their own language

SATO, Takahito*

Keywords

active listening, Japan-ruled Taiwan, caring, language and personality, recovering humanity

* Waseda University, Tokyo, Japan
E-mail address: satotakahit@gmail.com